



東京学生柔道体重別選手権の決勝で戦う小川(左)と田中。共にまだ1年生。4年後の東京五輪の代表、ひいては金メダルを目標に精進して欲しい。



森下正部長



猿渡琢海監督



橋口祐葵主将。
66kg級で東京五輪の金を目指す。



紫紺の勇者たち *Heroes of the Meiji.*

最終回 柔道部

文・撮影／菊地武頭
写真提供／明大スポーツ新聞

—明大体育会の系譜—

東京五輪で金を狙う逸材も在籍 団体戦の日本一奪還を目指す

2005年に創部100年を迎えたことを機に作られた部誌『明柔明大柔道部100年の軌跡』。その冒頭に「栄光の明柔」と銘打って、五輪・世界・全日本チャンピオンの紹介ページがある。

オリンピックや世界選手権に出場するだけでも、大変な栄誉だ。だが『明柔』で紹介されているのは、チャンピオンだけ。五輪で銀メダルを取っても、部誌の冒頭に「栄光」として記されていないのだ。

明治出身の五輪優勝者は、中谷雄英(東京)、川口孝夫(ミュンヘン)、上村春樹(モントリオール)、吉田秀彦(バルセロナ)、阿武教子(アテネ)の5人である。

ここでは、世界選手権優勝や、その強さから広く国民に慕われた選手の名も列挙しよう。曾根康治、神永昭夫、坂口征二、篠巻政利、須磨周司、園田隆二、小川直也、秀島大介、棟田康幸、泉浩、海老沼匡、上川大樹……。錚々たる顔ぶれだ。4年後の東京オリンピックでも、代表になりうる逸材がいるという。猿渡琢海監督が語る。

「来年度の主将で、すでにシニアの大会で活躍している66kg級の橋口祐葵(政経3・延岡学園)。最も注目度の高い重量級では、小川雄勢(政経1・修徳)、田中原大(政経1・高川学園)、春に社会人になる上田輔麻(政経4・大成)の3人。100kg超級は切磋琢磨したこの3人の中から日本代表が出て、金メダルを獲得してもらいたいです」

栄えある第1回優勝校

日本柔道界を牽引する明治大学柔道部が誕生したのは、1905年(明治38年)。23年(大正12年)には、明治を含む13校からなる東京学生柔道連合会が発足。翌年、明治神宮体育大会柔道大会(全日本学生優勝大会の礎)が開催され、明治は栄えある第1回大会の覇者となった。31年(昭和6年)にはアメリカ遠征を敢行。西海岸を中心に試合やデモンストレーションを行った。以来、多くの現役・OBが海外での柔道普及に尽力。富賀貞典(フランス)、

鳥海又五郎(サウジアラビア)のように、ナショナルチームのコーチとして奮闘した者もいる。

ところで、全国に散るOB(明柔会員)が学生に手厚い援助をしているのも柔道部の特徴。そのOB達からは、「いつになったら優勝が見られるんだ」という声援が、猿渡監督のもとに届くという。

学生柔道の全国大会は、全日本学生柔道団体優勝大会(春)と全日本学生柔道体重別団体優勝大会(秋)の2つの団体戦と、全日本学生柔道体重別選手権という個人戦の3大会が行なわれる。個人戦では、今年度100kg超級で小川が優勝。一昨年の寺崎達也、昨年の上田に続いて3年連続で同階級を制覇するなど活躍が目覚ましいが、団体優勝は2001年以来遠ざかっている。

団体戦で優勝してこそ

「同じ釜の飯を食って、辛い練習に耐えてきた仲間達と力を合わせて団体戦で優勝するという達成感は、ほかでは味わえないもの。今も私の中に残っているその感動を学生達に伝えたくて、団体優勝を部の最大目標にしています。団体戦では、相手チームとの戦力

差を考えながら、選手それぞれが役割を果たさなければ優勝できません。役割とは、『勝つこと』と『失点を出さないこと』です。相手が体格で上回っていても格上であっても、相手選手の分析など大会前にしっかりとした準備と強化さえすれば、勝つことができるのが柔道。色々な能力をレベルアップさせるきっかけにもなります。更に個人戦と異なり、相手を立技で投げるか、寝技で抑え込むかしなければ勝ちにならないルールであるため、勝つための『技』や一本を取る柔道を身につける上で、大切だと考えています」

日本一奪還への手応え

団体戦の意義を説明したうえで、猿渡監督は今後の展望を語った。「今年度の団体戦は、春がベスト8、秋は3位。1年生、2年生が中心の若いチームで経験不足が否めない内容でした。しかしながら、来年に優勝するための手応えは持って帰ってきました。日本一を奪還したら、明柔会(OB会)のご協力のもと、ハワイ合宿を行いたいです。私も学生時代にハワイ合宿を経験しましたが、あんなに楽しい合宿は初めてでした(笑)」(文中敬称略)